不斷不絶の向上的修養を間斷なく積みあげねば、我國軍を世界の光華たらしむることは到底出來ぬと覺悟せられよ。

此日更に午後一時四十分頃と次て午後四時と夜に入つてからとに、三度迄中央隊は爾靈山東北高地及び老虎溝山に向つて突擊したが、何れもそれが各箇各別なる小部隊の突擊であつて全隊の歩調が一致しなかつた爲に。敵は前に述べたる四山頂より互に相應援して。彼の操典第二部第九十八第四項の『攻擊ヲ受ケザル地區若クハ敵ヲ擊退シタル地區ノ守兵ハ比隣地區ヲ攻擊中ナル敵ノ側面若クハ背後ニ出テ之ヲ攻擊スベシ』といふ要領を應用し我突擊隊を散々に苦しめた。之が爲めに我軍は驚くばかり多大なる傷死をこしらへた而已て、終に其目的を達し得なんだが。獨り此の諸方面とも不結果の間に於て、最初に勇敢に同山西南高地全部を一度占領して擊退せられたる、右翼隊の香月中佐の部隊だけは其高地全部を再び奪回せんとして失敗したけれども、其一部分だけは頗ぶる堅固なる防禦工事を施して、それを確實に占領し得たの

て。此夜一寸敵に取り還されたけれどもこれが終に將來此の全山を陷落せしむる爲めに、最重最要なる據點となつたのである。實に此日に於ける此方面の戰鬪では、此右翼隊の香月中佐の獨舞臺の如き手柄を遺したのは稱賛すべきものと思ふ。而して戰史の上で此日の戰況を讀過しつゝ靜かに熟考して見ると、彼の操典の第二部第三十七の

『一旦占有セル地區ハ尺土ト雖再ビ之ヲ敵ニ委スベカラズ云々』

といふ條項と同第二部第二十の

『戰鬪ヲ實行スルニ方リ所要ニ充タザサル兵力ヲ逐次ニ戰線ニ增加スルハ大ナル過失ニ屬ス云々』

とある兩條が、頗る痛切なる教訓を此戰に與へて居るのを認めざるを得ぬ。即ち何れの方面も何れの部隊も此日に於ては、一度は必ず其目的地たる山の巔頂までは達して居るのであるが、其死傷多くして後方よりの增援の絶へたる爲めに、常にこれを棄てゝ退却せざるを得ざるに至り。更に兵力を加へて

又同一なる惡戰を繰り返して居る。元より事後に於て机の上でこれを評論する樣に、其場合には容易に都合よく參らぬのはいふ迄もないが、此場合元々其酷烈慘怛たる多數の死傷を覺悟してかゝつた戰鬪である以上。有らん限りの兵力を最初に於て攻路内に重疊して、其先頭が一度山頂を占領したならば跡から〳〵どん〳〵其死傷を補缺して。一度占領したる土地は岩にしがみ付いても土に喰ひ付いても決して手離なさぬ樣にしたならば、思ふに此の日に此の爾靈山の大部を占領し得たであらふ。就中其中央隊たる馬場少將の部隊の行動の上に於て、評者は一層痛切に此の操典の兩條の忘るべからざる大戒告大敎訓であることを、信ぜざらんと欲するも能はぬのである。

明れば二十九日夜がほの〳〵と東天紅を潮する頃になると、我此の爾靈山攻略の戰況は、益〻我軍の爲めに非運である不利である。香月中佐は不相變頗ぶる頑强に同山西南高地巔頂の一角を堅守して、全攻擊部隊の爲めに非常の有利なる據點を成形した儘で居るが、中央部隊の向ふたる同山東北高地は散

々に敵に苦しめられて、其中腹の散兵壕すらも守備非常に危きに瀕するといふ有樣。これが增援隊は其位置に達せざるに先だち、途中に於て老虎溝山から側防する機關砲に殲滅せられるといふ大悲境に立つて居る。更に其左方老虎溝山を攻擊したる秀島少佐の部隊は、一時勇敢に占領したる頂上の陣地は棄てたけれども、其直後の突擊陣地に蹈み止まつて防禦工事を堅固にし。以て敵の機關砲火と手榴彈片の酷烈を極めたる苦境に於て、必死になつて現狀を維持しては居るが到底戰況開展の見込はたたぬ。

前にも既に一寸と述べて置いたる如く二十八日午後五時頃、大山總軍司令官から『我艦隊が自由に行動し得られる樣に、速に旅順要塞の死命を制してやれ』といふ訓令が來たので。其計畫に就て熟考して居る矢先きへ、第一師團攻擊失敗の悲報を得たる乃木第三軍司令官は。此に至つて二十七日以來事情已むを得ざりしとはいへ、兵力逐次增加的の攻擊をやつたのが頗ぶる不合理であるを悟つて。こゝに忽ち其攻擊の方法を一變し更に爲し得るだけ兵力を

増加して、一舉に此の爾靈山を奪取せんと企だてられたが。其の變更せられたる攻擊計畫の大要を述べて見ると、第一師團に第七師團の全部を加へて、まだ其兵力の不足を感じたならば、第九、第十一兩師團からも各〻二三大隊を之に増加せしめて、使用し得る限りの部隊全部を以て是非〳〵速に爾靈山を攻略せんとして、其攻略隊の指揮を第七師團長大迫尙敏中將(現大將學習院長)に委託し、歩兵第二十七聯隊の第一大隊而已を以て軍の總豫備隊とした。二十七日以來の兵力逐次増加の攻擊は、確かに其攻擊を不成功に終らしめたる大原因である。かくしてそれに氣がついて一時に兵力の大増加を決行して、更に大々的大攻擊を爾靈山に加へてこれを粉碎せんとしたる、此の乃木將軍の攻擊計畫の變更は、これ實に已むを得ざるに出でたとはいへ最も適當なる次第であつて。慾をいへば最初から此の方法を採用して、餘りに急がず焦らず計畫を完全にして此攻略を實行したならば、非常に有利であつたらふけれども。左までに敵が頑强ではあるまいと考へたのが間違ひて、何度か烈しい攻

擊を繰り返しても敵壘を奪ふことが出來ず、終に現在の樣な狀況に移つて來たのであるから。こゝに全く其計畫を改めて一時に大兵力を加へ、以て一氣呵成に此の堅固なる爾靈山を攻略し樣としたのであつて、先づ此の攻擊計畫變更の處置も、大に理由あるやり方であると自分は思ふのである。

新攻略隊指揮官となりたる大迫第七師團長は、二十九日の午前七時に第一師團司令部の所在地に到著して、第一師團長及び第三軍參謀に面會して彼我の情況の詳細を知り。愈〻爾後に於ける攻擊の計畫を定めて、三十日を以て爾靈山及び老虎溝山を同時に攻擊することにしたが。其計畫及部署の梗概は戰史第六卷第四九二頁に記載する通りである。此場合新攻擊隊指揮官は新著せる齋藤太郎少將(現中將)を以て爾靈山を攻擊せしめずして、依然友安少將をして之が攻擊に當らしめて、稍〻攻擊の樂なる老虎溝山の方の攻擊を吉田清市少將にやらせることにしたが。これ實に最も適當なる處置であつて、敵情、地形に慣れたるものを以て、繼續して攻擊をさせたのは萬事に就て好都合であつ

たが。此際三十日に於て攻撃を決行することにしたのは評者は頗ぶる不同意である。といふ所以は外でもない既に新指揮官の大迫閣下も、地形、敵情に不知不案内なる軍隊を用ひて、急遽攻撃を決行せしむるは不利であるといふことを覺知した。であるならば何故に今少しく其間に充分の餘裕を與へる樣にせなんだか。我軍に餘裕を多く與へた場合には敵が其間に復舊工事を完成するの懸念はあるが、併しこれは已むを得ぬことであるから、どん〳〵重輕砲撃を烈しく繼續して、敵が其樣な行動の出來ぬ樣にこれを彈雨で射すくめて。さて其間に於て新來の第七師團をそれ〴〵其攻撃の方面〳〵に集合部署して、それから充分に其將卒一同に敵情、地形をよく〳〵のみ込ませたる後。一切の諸準備を完全無缺に整頓してひし〳〵と敵に近迫して、そこで一舉疾風迅雷防せぎ堪らへも出來ぬ樣に、猛烈果敢に其攻撃を決行するが至當であつて。それが爲めには僅かに一日の猶豫を與へた位では到底それだけの準備は不可能である。論より證據評者の友人にも澤山此時の戰に參加したものがあるが、

大隊長以下の各幹部は全く少しも敵情も地形も知らずして、無我夢中で攻路の中を匍匐して四ッんばいにはいまはつた揚句の果。どれが爾靈山やらどれが敵の堡壘やら少しも知らずして、遮二無二突撃を決行したのであるからおたまりこぼしがある筈がない。又々全軍殆んど全滅といふてもよい程な大痛手を負ふに至つたのである。これ實に餘りに其攻撃の實施をはやり過ぎたのである、充分に中隊長以下に敵情、地形を了解せしめずしてこれに突然突撃を命じたのであるから、其突撃が支離裂滅至當に決行せられなんだのはいふ迄もなく。少しの注意で地形を利用すれば敵眼を蔭蔽し敵彈を避けることの出來る場所で、態〻敵方に曝露して大損害を受けたといふ樣な失態は、實に諸方に數へ切れぬ程續出したのであつて。これ即ち餘りに敵の工事の復舊に心配し過ごして、新增援諸隊をして豫め準備を整へるの時間を與へなんだのが原因である。難者或は曰はん、第七師團の地形、敵情を熟知する爲めに、二十九日一日間の猶豫を與へたのであるから、それで充分に準備は整へられる筈で

はないかと。いかさまこれが普通の場合ならばそれて出來ないことはあるまいが、此所は非常な場合てある上に困難なる地形てあつて、敵に近く兵を進める爲めには其の殆んど全部を、不完全極まる攻路によつて進めるの外策がないのてあるから。其時間を要することは實に豫想以外てある而已か、僅かに少しく頭を持ちあげて敵を望見しても忽ち敵の狙擊を受ける位てあるから、暫時の間では容易に敵情や地形を偵察することは出來ぬのてある。て評者は此場合今少しく時間の餘裕を與へたならば、必ず今少しは好都合に攻擊を進捗せしめ得たてあらふと考へる。即ち第七師團をして此の二十九日の中に各其攻擊方面の新部署に就かしめて、それと協同して攻擊を決行すべき第一師團の諸隊幹部をして、十二分に敵情と地形とを詳細に此の新增加の幹部に指敎せしめて、然る後に於て愈〻攻擊を實施し樣とするには。其部署に就く爲めだけに廿九日一日を費やして仕舞ふは確てあるから、尙翌三十日一日の猶豫を與へて其間に充分に地形と敵情を知らしめて、さて十二月一日に於て一齊

に攻擊を實行せしめたならばよかつたらふ。斯くしたならば敵が何れの方向に居るのか知らない中に、忽ち死傷して仕舞ふといふ樣な滑稽にして悲慘なことはなかつたてあらふ。自分の知れる限りの將卒にして此の爾靈山の攻擊に加はつたる第七師團の人々は、敵は果して何れの方向に居るのやら全く知らずして突擊し、夢の樣なる中に忽ちにして負傷したといふものが八割以上てある。此の樣な不用意千萬な準備のし方では、到底此要害無双の堅陣を突破することは出來ぬ。既に地形、敵情を知つた指揮官の必要を認めて、友安治延少將(故中將)を其儘にして攻擊隊長とし、更に新來の者の爲めに一日の餘裕を與へるだけの注意があつたならば。更に今少しく其時間を延長して將卒一同に實際に敵情、地形を知り得るだけの餘裕を與へたかつた。折角其注意はしながらもそれが實際に於て效果を現はさなんだのは、實に遺憾千萬てあつたと評者は思ふ。これ要するに軍司令官も師團長も、一刻も速に此山頂を奪取せんとの心に焦せりがあつた爲めに、更に其諸隊が其部署に就くに方つて地

形と敵情との爲めに豫想外に時間を多く費やした爲めに。終に此樣な結果を來してそれが非常に攻擊戰鬪の上に響いて、又々攻擊不成效に終つたのてあると自分は信ずるのてある。

今一つ立もどつて此日の戰に於ていふて置きたいことは、我が第一師團の中央及び右翼兩隊が折角山頂に近い所までを占領して居りながら、敵の爲めに最も乘ぜられ易い所の此の二十八日の夜に於て、此の困憊せる第一線に新兵力を加へて充分に警戒せざりしが爲めに、勇敢機敏にして南山以來敵にさるものありと知られたる名將トレチヤコフ大佐の爲めに、二三日がかりて辛苦艱難の限りを盡してやつとのことて占領したる、各山頂を悉く一度に恢復せられて仕舞た而已か、其中腹の散兵壕までも彼の手に返納するといふ逆境に立つに至つたことて。これ其大原因は攻擊諸隊が其死傷夥ただしく何れも大部分の兵員を失なひ、其現員が非常に減少した爲めに、充分に敵の夜中決行したる此の恢復攻擊を拒支する能はなんだのてはあらふが。一方確かに連

日の惡戰苦鬪に疲勞した爲めに、其警戒にも油斷があり不充分なる點があつたに相違ない。又其兵力もまだ〳〵此夜の逆襲位は支へ止められぬ程ではなかつたのに、姑息に其第一線の兵力を餘り少なからしめた爲めに、終に全く一度は我手に占領して居た大切なる山上を、殆んど全部敵に取り還されて仕舞たのてあつて。これ實に已むを得ざりしとはいへ、一面此の方面守備に任じたる諸隊の油斷てあると評者は思ふ、去るにても敵の勇將トレチヤコフは實に敵ながら見あげた猛者てある。

二十九日一日を準備に費やして愈〻三十日の早朝より決行したる、第七、第一兩師團混合の決死の大攻擊は、又々何れの方面も到る所に於て非常なる大打擊を被むり、其死傷の莫大なること實に豫想の外てあつて。第七師團長が充分に新來の部下に敵情、地形を了解せしめずして、此の殆んど現世の地獄とも稱すべき爾靈山に突進せしめた因果應報は、忽ちにして多大の犧牲の屍山血河となつて目前に現出した。然るにも關せず一氣に此の嶮山を占領せんと焦

りに焦りたる第七師團長は、更に其攻撃の到底不可能なる場合に關せず、無二無三に其突撃を後方より强いたものであるから。前線にある各指揮官は半は狂亂半は糞燒氣味になつたものもあり、唯だ死ねや〳〵とばかりに無益なる搭闘奮撃を繰り返して、何れの方面も殘り少なになるまで大惡戰大苦闘のあらん限りを盡くしたのであつて。第一師團はいふに及ばず新來の第七師團も其大約過半數は、屍體若しくは准屍體となつて山上山下に堆積せられたが。其目的は殆んど寸毫も達せられずして依然として敵は爾靈山上の、お山の大將の位置を確實に占めて居るといふ、實に筆にも口にも述べられざる大損失を我軍は受けたのであつた。

是れ蓋し其理由は前より評者が論じたる如く、頗ぶる明瞭にして頗ぶる知り易き過失から來つたものであつて、軍司令官が兵力逐次增加の大不利なるを悟つて、思ひ切つて第三軍の許す限りの兵力を此爾靈山に使用したのは、これ實に頗ぶる適當なる處置であつたけれども。久しく大阪に逗留せしめら

れて脾肉の嘆聲も飽きる程に吐き盡したる第七師團は、まだ此の現世の地獄に到著して、僅々數日＝中には數時間＝しか經ぬのにそれに最大難事業たる此の爾靈山の攻撃を命じた。それは新鋭の兵力を以て頑敵を一撃に粉碎せんとするのであるから非難はないけれども、地形に熟し敵情を知りぬいた將卒でも少しの油斷をすれば忽ちにして全滅の厄に陷るといふ、此の要塞戰場中に於ても名に響きたる爾靈山の攻撃をさせるのに。敵が我が重砲諸隊の破壞したる諸砲壘塹壕を復舊するといふだけの懸念の爲めに、碌々地形も敵情も探り得るの時間を與へずして、否々僅に一日間の豫備時間は與へたが、それは實に名のみであつて全く第七師團の將卒は、爾靈山といふのがどれであるか、老虎溝山、滕家大山がどれであるかも知つたものは殆んどない。初陣の戰爭慣れぬ殊に要塞戰などは夢にも見たことのない新來兵を、形容でなく事實に於て彈丸雨飛する爾靈山の大修羅場へ投げ込んだのであるから、これを極端に形容したならば全く無駄死犬死をさせに、劔の山や針の山へ第七師團

長が惡鬼羅刹となつて追ひ登せた樣なものてある。如何に勇士てあつても健卒てあつても、方角の知れぬ險山の頂上から砲彈、銃彈、手榴彈の上に更に大石、小石まて投げ付けられては、如何に奮戰健鬪を繰り返しても勝て樣道理がないのてある。然るに後方からは無茶苦茶に突擊を强制するので、前線にある將卒は殆んど憤激の天頂に達して。死を見ること歸するが如き日本人の弱點として、何れも〳〵軍司令官や師團長の催促を受けるといふ樣な恥辱を見んよりも、潔ぎよく戰死するが何より無雜作てあるといふ傾向を生じ。勇敢なる長所を惡用して勝算もなければ占領の目的も立たぬに係はらず、敵中に突進しては一身を塵芥鴻毛よりも輕く棄てたものが何程あつたか知れぬのてある。斯くて新來の可惜勇士を片はしから打殺して仕舞たから、三十日の攻擊は全く大頓挫を來して仕舞て、僅かに何れの方面も山腹の散兵壕を維持し得たに過ぎず。翌一日に至つて夢中てあつた第七師團長も始めて目が覺めて、其無謀の攻擊を中止するに至つたが、これ實に軍司令官も手ぬかりてあれば、

當の責任者たる大迫第七師團長も大なる過失を犯したのてある。即ち評者が前々から度々申述べたる通り、二十八日から二十九日の兩日に亘つて其新攻擊計畫に對する部署に就かしめて、其新受持ち地區に到著した上て充分に其腹の中て、敵の配備も敵の斜射側射の來るべき方向も、はた其突進すべき土地の有樣も暗中にも明白に納得の出來る樣に、敵情、地形を探索偵知するの餘裕を十二分に與へて。さて其後に於て諸山一度にこれを攻擊したならば、敵は非常に頑强てあつても必ず敵する能はずして、一擧にこれを奪取することが出來たてあらふ。否々今一二日の準備時日を與へてから一氣呵成に總攻擊を猛烈にやつたならば、思ふに此の惡戰の半分も三分の一も損害を受けずして、確かに此の爾靈山を陷落せしめ得たてあらふに、實に全く殘念千萬なる早まつたことをしたものてある。

とはいふものゝこれは事後からの觀察てある、此十一月の三十日ても一般國民の豫想よりは少なくも旅順の陷落は二ヶ月は遲れて居る。又バルチック

艦隊はもう鼻の先の印度洋まで走つて來たといふ評判、然るに一方要塞は其主要防禦線の一角をも我軍の手に握つて居らぬ。大山元帥が度々催促しても運びが惡いので、遠方態々其總參謀長兒玉大將を旅順に派遣して居催促をするといふ始末。丁度折も折其居催促の兒玉大將が到著したる二十八日の夜には、折角其頂上の大部分を占領して居た爾靈山を全く敵に取り還されて。其確なる悲報を得た爲めに兒玉將軍は歩兵第十七聯隊を大切な北方の戰線から、此の旅順に赴援せしめるといふ羽目になつたのであるから。人並はづれて責任を重んじたる古武士的性質の乃木將軍、何として泰然自若として居ることが出來樣。『急ぐなよ旅順の敵は逃げはせじよく食ふて寢て起きて戰かへ』といふ自詠の態度を一變して、一刻も早くあの一撮まみ程な爾靈山を踏みつぶせとの嚴命、これは此場合決して無理からぬ誰しもやり兼ねぬ處置である。其嚴命を受けたのは誰れあらふ薩摩隼人の純潔なる老武士の標本と稱すべき、律義一遍の大迫第七師團長であつたからたまらぬ。まして況んや此師

團は動員以來非常に多くの時日を內地で費やして、出發してからも又々大阪の長滯留、上下一同勇氣が張りつめて張り切れる樣になつて居た其途端、此の勇ましい嚴命が下つたのであるから。左なきだに猪突をやり兼ねぬ薩摩武士が先頭で、其大得意の大々猪突を決行したので、殆んどとり返しのつかぬ程なる大犧牲を拂ふたが、終に其攻擊は全く不成功に終つたのである。で事後から之を机上に於て研究して見た場合には、頗ぶる缺點が多い樣であるけれども此の場合は實に已むを得なんだのかも知れぬ。此の外には全く處置がなかつたかも知れぬのであるが、此後とても此樣な難儀な場合に必ず出會すべき我青年の將校諸君は、此の爾靈山の攻擊のやり方の頗ぶる過失の多く缺點の多かつたことは、其戰史を熟讀し玩味し論難討議して明白にこれを研究して置かねばならぬ。であるから詮じつめて見ると此場合乃木大將も餘りに陷落を急ぎ過ぎた、又大迫將軍も今迄待ち遠しかつた爲めに一時に勇氣を度外に出し過ぎた。此の二つの過失が重なつた爲めに折角計畫を變更して、大

兵力を以て決行したる三十日の爾靈山の攻撃は、頗ぶる悲慘極まる有様を以て五日まで再興を延期せねばならぬ次第となつて仕舞だのである。よく俗諺に『急がばまはれ』といふことがあるが、これは簡單にして實に要を得たる譬であつて、此兩將軍が否々攻圍軍全體が此『急がばまはれ』の金言を服膺して居たならば、確かに此の爾靈山は十二月の一日か二日には攻略し得て。それて其傷者や死者は此失敗よりはずつと少なくて濟んだてあらふ、これは決してて評者が自分勝手な理窟をこねるのては決してない。

其後十二月五日に至つて愈〻攻撃の諸準備を整へ了りたる第七師團長は、爾靈山附近の四高地を一時に攻撃するを不利なりとして、先づ第一番に村上大佐をして爾靈山西南高地を奪略せしめ、其成效を確實に認めたる後に於て同山東北部を攻め取り、次て老虎溝山を陷落せしめるといふ方法て、各箇各別に之を攻撃して逐次に之を占領する計畫てあつて。此朝我が輕重數百の全砲兵が猛烈なる射撃を以て敵を苦しめつゝある間に、爾靈山攻撃諸隊は何れも

其部署の位置に就き。午前九時十五分を以て村上大佐の指揮する諸隊は、撰拔隊と手榴彈班を先頭にして猛烈に突進して、忽ちにして同山西南部の山頂を占領したが。敵も烈しく銃砲火をこれに集中したので死傷の數は夥ただしく、殊に逐次に各箇に各高地を攻撃した爲めに、此西南部山頂は未だ攻撃を受けざる滕家大山と爾靈山東北部山頂との兩方から、最も酷烈なる小銃火を受けたる上太陽溝及椅子山からの砲火が其上に加はつたので。忽ちにして總兵力は四十人ばかりの僅々たるものに打ちなされ、しかもそれが敵散兵壕内に伏臥して頭をも持ち擧げることが出來ぬといふ始末。勇敢なる工兵第七大隊の小隊長今川中尉が極力防禦工事に努力して、此の兵員を勇ましく鼓舞激勵して指揮したればこそ、僅かに其占領位置を保ち得たのてあつた。

此の爾靈山西南部を村上大佐が辛くも占領したのが導火となつて、其機を逸せず齋藤少將が後方部隊を增加して推進に全力を盡し。其中に敵が私かに山頂の南側面に通ずる暗路を作つてあつたのを見付けだして、潛匿したる敵

を塵殺してこれを利用して南側面の開口をも略取したので、こゝに爾靈山西南の高地巔頂は午前十時二十分に至つて之を攻略し得たのであつたが。これが手始めて隨分と烈しい戰を交へ多大の死傷はこしらへたが、午後一時四十五分頃には渡邊水哉大佐の指揮せる部隊によりて、爾靈山東北高地の巔頂も占領せられ。此間老虎溝山攻擊隊は全力を盡して其當面の敵を射擊を以て壓伏した。爾靈山西南と東北の兩高地が略占領し得られたので、更に其兩高地の中央鞍部の敵を擊攘して全山を占領せんとして、平賀少佐の一大隊を一線に散開して進擊せしめたが。敵は頑強に手榴彈を以て我れに向て屢逆襲し來り、容易に全部を確實に占領するを得なんだが、午後四時頃には大なる敵は同山上には居らなくなつたので。岩石堅牢を極めた土地に千辛萬苦漸くにして工事を施こし、纔かに山上を占領するに足るべき掩體をも完成した。

斯くなつた後は夜に入らぬ中に其攻略を確實にするに上下熱中して、有らん限りの兵力を此山上に增援して占領を確實にし。日露戰役中最第一の惡戰

と稱すべき爾靈山の大修羅場の大詰の幕は閉ぢたのである。此の場合此の爾靈山の各高地を一度に攻擊せずして、各箇各別に攻擊して始めてこれを占領し得たのであるが。これは大に考究するを要する問題であると評者は思ふ。前には各高地を一齊に攻擊せんとして毎回失敗し、終には逐次各箇に順々にこれを攻擊して其の占領を確實にしたからには、此樣な場合には一つ宛攻略して漸次に進む方がよいと思ふ人があるかも知れぬが、評者は何としても其各箇各別逐次攻擊には同意することは出來ぬ。勿論此の場合成效はしたけれども成敗を以て輕々しく此樣なことを斷定すべきものでない。此場合自分は矢張其各高地に相當の兵力を向はせてある以上は、同時に其攻擊を開始せしめて敵をして互に相側防し相援助せしめ得ぬ樣に攻擊するが至當であると考へる。

即ち前に度々失敗したのは各攻擊隊が一齊に攻擊する計畫てはあつたが、それがいつも〳〵故障の爲めに齟齬を生じたので、事實は常に各箇各別の攻

擊になつて仕舞て失敗したのであつて。此の最終の五日の日には逐次に各箇に諸高地を攻擊したのであるが、一の高地を攻擊する場合に他の諸高地に向ふたる攻擊隊は、何れも猛烈なる牽制的の射擊を決行して、壘上に頭を出して他の高地を援助することの出來ぬ樣に壓伏した。で計畫は一高地づゝ各別に攻擊するといふのであるが、その實際は各高地が一齊に攻擊を開始したのと同一であつた。前の度々の失敗は計畫は一齊攻擊であつたが、事實は各箇各別の攻擊に終り。これに反して最後の攻擊は各箇攻擊の計畫であつたが、其實施は全く准一齊攻擊とも稱すべき結果を現はしたので、始めて此の爾靈山を占領し得たのであると評者は信ずる。で若しも此五日の攻擊の際に於て一山の占領を確實にしてそれから他の高地に移るといふ計畫でなかつたならば、最初西南高地を占領したる村上大佐は、滕家大山や東北高地から苦しめられて、彼の樣に大苦戰をせんでもよかつたらふと思ふ。又老虎溝山の如きも明る六日を待つの必要はなく必ず五日に充分に奪へたに相違ない。で此樣

な場合に於て各箇逐次に攻擊するといふことは、此際成功はしたけれども自分は決して合理なるやり方ではないと考へる。但斯くいふはいふものゝ何度となく仕損じやりしくぢつたる此攻擊で、全山は到底とれぬと斷念して、よし此山の一角でも確かに占領すれば、そこから觀測して敵艦を擊沈することが出來ると。何度となき羹に口をやいたる結果は、準備の整ふて一齊に攻擊し得べき此五日にも、又やり損じてはと鱠をふくの諺の如く、先づ其占め易い西南部から逐次に奪略するといふ手段をしたので。これは決して全くの間違てもなければ、此場合斯く計畫の消極的になるのは免がれ得ぬことではあるかも知れぬが、互に相援助し巧に相側防し得る諸高地を攻擊するには、是非各高地を一齊に攻むるが至當のやり方であつて、決して逐次に各箇に攻略すべきものでないといふ原理を、どこ〳〵迄も評者は主張して讀者諸君の參考に供するのである。

十二月五日より六日に渉つて大激戰を交へたる結果、終に此の旅順要塞唯

一の鎖鑰たる爾靈山は全く我軍の手に落ちて、こゝに始めて我乃木大將の任務は達成せらるゝに至つた。然れども其これが爲めに支拂たる代價は頗ぶる貴いものであつて、此の爾靈山攻略戰の始まりたる十一月の二十六日より十二月の六日に至る間に於て總員六萬四千の戰鬪參加人員の中に於て、戰死約五千人と負傷者約一萬二千人といふ莫大なる支拂をしたのであつて。即ち約全員の四割といふ大損失を蒙むつたのであるが、爲めに日露戰役に一段落を劃して、日本海大海戰の大勝の基礎と奉天會戰の大捷の先駆をなしたのは確なる事實であるから、これは必ずしも度外の高價を拂つたと評すべきものではあるまい、死傷をのみ恐れて居ては決して勇戰は出來ぬのである。

更に終に臨んで例によりて露軍に就て駈歩で研究をするが、此山を守備したる敵は實に天晴れなるものであつた。評者は實に防禦戰に於てこれ程に靭强にこれ程に頑固に防守したる先例を、何れの戰史に於ても見たことがない實に感ずるに餘りある立派なものである。始め此の爾靈山上には餘りに堅固

な立派な工事はしてなかつたのであるが、我軍がこれを目がけて遮二無二突進し、敵も亦此山の喪失は艦隊の全滅にして、取りも直さず旅順の陷落なることを覺知して以來。晝夜を分たずその工事を補足し改修して益〻堅固ならしめ、鐵條網は申すに及ばず散兵壕には悉く掩蓋を設け、暗路を以て上下の散兵壕を連絡し、到る處に横墻を設けて以て我銃砲火に對抗するに熱中し。長時日の間野砲百八十門、攻城砲二百六門其他の大砲四十門中の大部分の砲彈の彈巣となつて、頑然として持ち堪へて居たといふのは、人間業以上である敵ながらも實に天晴れてある美事である。正に以て防禦戰鬪の模範とするに足るものであると評者は思ふ。而して其何故に斯くまで堅忍持久し得て我第三軍を惱ましたかといふと、彼れ露軍は我歩兵操典第二部第九十四の

『前略　然レドモ兵力及運動ヲ敵ニ祕スルコトヲ得又寡兵ヲ以テ衆敵ヲ扼止スルコトヲ得ベシ云々』

とある原則の如くに極めて合理に極めて適當に山地の占領を部署し計畫し

て、同條の

『前略　一般ニ展開區域狹ク交通不便ニシテ運動容易ナラズ大部隊ノ指揮ヲ困難ナラシム云々』

とある缺點や又同條の

『凡ソ山地ノ戰鬪ニ於テハ比隣部隊ノ協同動作ヲ期待シ難ク各級指揮官ノ獨斷ヲ要スルコト多キモノトス』

とある不利なる方面を將士の熱心と勇猛と獨斷專行とを以て全く償ひ盡して、彼の附近の相連環せる四山頂上の敵兵が互に相協力して、我軍の攻擊毎にそれを悲慘極まる大苦戰に陷らしめて、此の十二月の六日まで其陣地を保ち得たのであるが。一方其地形は同操典第二部第九十五の

『山地ニ在リテハ攻防共ニ敵ヲ瞰制スベキ位置ヲ占メ砲兵特ニ山砲兵及機關銃ヲ利用シテ道路、谷及斜面ヲ掃射セシムベシ又交通網ノ設備ヲ完全ナラシムルコトヲ勉ムベシ一部隊ト雖若最高處ヲ占ムルコトヲ得バ敵ノ動作ヲ

觀察スルコト易ク其志氣ヲ挫折セシムルノ利アリ云々』

とある條項の利益を悉く有したる上に、其防禦に任じたる將卒の熱心は、其地形の若干不利なる點を其勇氣と熱中とを以て、完全に修補し改善したので敵たる評者の如きものからも、稱賛の辭を呈せざるを得ざる程の勇戰が出來たのであるが。十二月の五日六日の最後の頃に至つて、一度奪はれたる此の爾靈山を恢復せんとして數度攻擊を企てたが何れも失敗に歸したのは、步兵操典第二部第九十八第三項の

『敵兵攻擊シ來レバ防者ハ射擊ヲ以テ十分之ヲ擾亂シ其損害ト斜面ノ攀登トニ依リテ混亂疲勞セルニ乘ジ猛烈果敢ニ逆襲シ敵ヲ殲滅スルコトヲ勉ムベシ』

とある、彼れ露軍が常に慣用して我軍に莫大の死傷を作らしめたる戰法を、今度は入れ代つてお山の大將となりたる我村上大佐や渡邊大佐や、はたまた其他の爾靈山占領部隊から逆に應用せられたので。流石の敵も終に此地を擲

棄して其後方に陣地を占めざるを得ざるに至つたのであつて。即ち此の理由から觀察して見ると敵が地の利を占めて、且つ山地戰に於て最も困難なりとする諸部隊の協同動作を最も巧に實施した爲めに、我軍は非常な難境に立つに至つたのであつて。一朝我軍が地の利を占むると共に利害全く一變して、終に旅順開城の大原因を此一彈丸黑子の山上に於て開くに至つたのであつて、此の爾靈山の戰鬪は非常に多くの教訓を我々軍人に與へて居るが。就中評者が最も此研究中に深く〳〵其腦裡に感徹したことは、勇敢なる指揮官の死傷が其陣地の運命に大關係を及ぼすことである。即ち彼の十一月二十八日の攻擊の不結果は、主として中央隊の寺田中佐の負傷が其原因をなして居り。敵の方に就ていふて見ればトレチヤコフ大佐が同山を指揮して居る場合には、常に露軍は非常なる勇氣を現はしたが、其人が負傷の爲めに退くと共に、忽ち同山の戰況は我軍に有利なる狀況を呈し來り。終には負傷後再び同山に歸來せるトレチヤコフ大佐の我砲彈の爲めに昏倒して人事不省に陷れる爲めに、

陣地を去れることが此の大切なる爾靈山を失なふの大原因となりつゝあることは、戰史を一讀過すれば極めて明瞭なることであつて。此の點からして論じつめて見た時には、戰鬪なるものは其指揮者の如何によりて勝敗が決するものであつて、有利なる地形も鋭利なる武器も、はた又優勢なる兵力も到底勇武無双なる一人の指揮官には及ばぬものである。であるから其勇猛なる指揮者の死傷は非常に其戰の上に大影響を來すべきは勿論であつて、我軍が此の爾靈山を占領しては取り還され、攻略しては逆襲せられたのは全く我が勇敢なる諸隊長は悉く死傷して、敵の勇將トレチヤコフ大佐の健在したる時機であつて。更に我軍が該山を占領して敵の恢復攻擊を美事に擊退したのは、再び陣頭に立ちしトレチヤコフ大佐の昏倒したる後であつて、我には勇猛なる香月中佐、村上大佐の健在したる時であつたのを見ても、如何に其指揮官の勇氣と死傷が戰鬪を左右するものであるかは明かであらふ。

何だが際物式に時好に投じて場當りをとる樣ではあるが、近頃世界に響き

たる青島の陷落の如き、我軍に於ても最後の總攻撃に於て攻闘軍の三分の一位は失なはねばなるまいといふ覺悟を以て、天長節を以て愈〻總攻撃を開始したのであつたが。案じたよりは生むが安く僅々數百の死傷のみで、名高い青島要塞何の苦もなく我軍の手に落ちて、最幸運なるバーナー、デストン少將や准幸運なる神尾將軍などが双肩に擔ひきれぬ程な勳章を贏ち得たのは抑〻何の爲めであるか、これ實に青島總督たりしワルデック少將の死傷が其原因をなしたのである。何に？ワルデック總督は今現に我福岡に其戀女房の歡迎準備に忙殺されつゝ頗ぶる壯健で居るではないかと。然り事實は全く其通りであるが捕虜となつたる大責任者でありながら、今本國は四方八面に敵を受け、危急存亡の目睫の間に迫る天下わけ目の大戰闘中に、部下の將卒の手前も憚からず女房や小供の歡迎をする樣な見下げはてたる根性骨では、初天邊から青島の指揮官は戰死して居たのである。即ち青島には要塞あり軍隊はあつたけれども其指揮者は始めからなかつたのである。であるから彼の樣に安々と

青島は攻略し得られたのである。ステッセル將軍は罪せられて一茶商となつて居るとか、併し彼れは實に勇者であつた彼の勇氣は其戰の有樣でも知れる。然るに彼も女房の可愛くなつたのが原因で忽ち開城するに至つた。即ち彼れ等西歐の軍人は國家よりも女房の方が大切なのである、人間も此程度迄退化してゆけばそれで國家は寂滅爲樂である。などゝ無暗に怨みもない人に對して惡罵を弄するのは好む所ではないが、要するに斯くの如き惡風習の我日本軍人の間に瀰漫しつゝあるを見ては、評者は非常に我國軍人の將來に向つて鬼胎を抱かざるを得ぬのである。それが爲めに思はず此樣な不敬な言を西歐の人々の上に迄及ぼすに至つたのであるが、贅言は止めにして結局青島の容易に取れて旅順の容易に取れなかつたのは何の爲めであるか。

甲は到底防禦しおほせるの見込なく、彈丸黑子の地孤城落日の悲境に立つて、其上に前にもいふ如く敵の指揮官は外交家ではあるが勇者ではない。而して其兵力は頗ぶる微々たるものであるから、最初から本氣に防禦に力を盡

したのてはない、つまり申譯の爲に戰鬪を交へた位のものてある。これを攻めたる我軍は如何といふに、敵本國は四方に敵を受け今や死活の大問題に迫られて青島などはどうなつても構て居れる場合てないから、時日にも其他にも何にも顧慮すべき所がない。そこて日露の戰役て苦い經驗をして居る神尾將軍は十二分に愼重に攻擊の準備をして、正々堂々と純然たる模範的の正攻法を用ひて之を攻めた。これが爲に青島は非常に容易に陷落せしめ得たのてあつて。乙は即ちそれとは總てが大に狀況を異にし、敵は大兵を擁して居り其要塞も非常に堅固て、其指揮官は彼れ是れはいふものゝ確かに勇士てある。それが海にはバルチック艦隊近接の確報を得、陸にはクロパトキン大將の大舉南進の企あるを知り、勝利の希望を前途に抱いて上下必死に奮鬪したのてある。これを攻めたる我第三軍は如何ん。十二月迄に此城を陷れねば我海軍は敵艦隊を迎ふるの準備が出來ぬ、又此の要塞を速に奪略して北進大山元帥に加勢せねば、日に時に其兵力を增加せる敵軍は、其優勢なる兵力を提さげて何時大舉南下を企たてるかも知れぬ。一日一刻も速に此要塞を陷落せしめねば、我陸海兩軍ともに如何なる悲慘な戰果を持ち來すかも知れぬ。即ち我れには時日の切迫といふ大問題が横たはり、彼には前途に大なる希望が見へて居た。これが爲めに旅順はあの樣に非常に骨を折つて、漸くにしてこれを開城せしめ得たのてある。其開城の原因も全く此の爾靈山の攻略が萬事を休せしめたのてあつて、乃木將軍が

『鐵血蔽レ山山形改。萬人齊仰爾靈山。』

と詠ぜられたのも決して溢美ても形容ても何てもない、正眞正明なる全くの事實てあるのだ。

甲寅歳晩　　無名

爐火化灰更漏遷。兀然枯坐是非禪。半鐺粥味淡如佛。
一簞官情清似仙。歳盡耽詩忘宿債。窮餘評史養殘年。
終宵不寢何公事。今我舞文嘲古賢。

大正三年十二月二十八日印刷
大正三年十二月三十一日發行

戰史評論奥附

著作者　無名戰士

發行者　宮本林治
東京市麹町區平河町四丁目十一番地

印刷者　山田三次郎
東京市芝區櫻川町十七番地

發行所　宮本武林堂
東京市麹町區平河町
振替東京一〇九一二

不許複製

如風居士著

●代金は前金を振替口座へ拂込みを乞ふ

戰史摘例

步兵操典證解

全三冊

總紙數千三百餘頁
引證戰例戰話約六百條
戰鬪實況繪畫六十葉
地圖戰鬪大小五十二枚
製本本綴洋布製最美本

價一部　四圓五拾錢　每冊　壹圓五拾錢　內地郵稅　一部二十錢　每冊拾貳錢

第一卷綱領第一部　第二卷戰鬪一般ノ要領、攻擊、防禦、追擊及退却　第三卷夜戰、持久戰、山地、河川、森林、住民地ノ戰鬪、他兵種ニ對スル步兵ノ動作

我操典の條項は本書によりて頗る易解且つ耽讀手を釋く能はざる好讀物と一變し了れり、即ち其意義を講釋する爲めに、快刀亂麻を絕つ底の筆鋒を揮ひ、更に其理由を證明する爲めに內外古今多數の戰例就中日露の最新戰役を、最も多く最も適切巧妙に引用し、一々不動如山の大鐵案を下し、一見其原則のよりて生ずる所以の根原を知得せしむるのみならず、內外有名な戰書の尤物多數を網羅して一層讀者の興味感激を甚深ならしめんと勉めたる我日本は勿論殆と世界萬國にも其比類を見ざる良著と稱する躊躇せず、果せる哉本書を一讀せる、當時の英國大使館武官ベルネ井ツ男爵及佛國大使館武官ベルタン大尉は何れも大使館武官ベルネ井ツ男爵及佛國大使館武官ベルタン大尉は何れも大賛辭を贈りて、著者が多大の勞力に酬いられたり、寔に必讀の最好著なり。切に愛讀を冀ふ。

發行所　東京振替貯金京市京橋區平河町一〇九一二　宮本武林堂

豫告　一月刊行　戰史評論　枕旦堡の防禦

終